

年間第 15 主日 ルカ 10:25-37

10:25 (そのとき) ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」

10:26 イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、

10:27 彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」

10:28 イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」

10:29 しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。

10:30 イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。

10:31 ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。

10:32 同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。

10:33 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、

10:34 近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。

10:35 そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。「この人を介抱してください。費用がもっと

かかったら、帰りがけに払います。』

10:36 さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」

10:37 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

-----

<まえおき>

聖書のたとえ話の読み方にはコツがあります。そのコツは「直前をみる」です。たとえ話のはじまる直前を見ると、なぜイエスがたとえ話をしたのか、その事情・背景がわかります。また、そこにたとえ話のテーマがあります。イエスのたとえ話はおもしろいので話に引き込まれてしまいます。直前をよーくみてテーマをつかんでおくと「ハッハ～、そういう訳でこのたとえがあるのか」と合点がいき、たとえの深い意味を味わうことができます。

<たとえ話「善きサマリア人」の直前箇所>

10:25 ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。

「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」

「試そうとして」とあるようにここには教えを聞くという気持ちはなく、イエスの揚げ足をとろうとする態度、姿勢があることが読み取れます。

10:26 イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいますか」と言われると…

普段ならイエスの答えは「わたしを信じなさい。そうすれば永遠の命が手に入る」です。実際イエスはガリラヤでそのように教え、しるしを行いました。しかし、ここでは「客観的」に律法＝聖書には何と書いてあるか、そして「主観的」にあなたはどう解釈するのか、と答え

のかわりに質問をなげかけます。律法の専門家が答え、イエスは専門家を称賛します。この専門家の答えは神への愛と隣人への愛という2つの掟が重要だとする点で、イエスとの間に意見の違いはありません。

10:29 しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人はだれですか」と言った。

律法の専門家は隣人論を展開しようとしています。イエスはこの問いに直接答えず、たとえ話を始めます。そしてたとえ話の最後には専門家に対して

10:36 さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。

と問いに対して問いでかえし、専門家の言質をひきだします。

10:37 「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

たとえ話にはいる直前で

10:28 イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」

28節と37節では専門家が正解を答え、イエスが実行を促す、セリフは違っているけれど同じ内容になっています。

隣人愛は看板やレッテルではない、言葉や口先だけでもない。行動でしめすことが大切なのだと語っています。これがたとえ話の直前に示されているテーマです。

<善きサマリア人のたとえ>

さて、きょうのたとえ話にはいりましょう。

10:30 イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。

ある人がエリコに行く途中で追いはぎ = 強盗にあって身包みはがされ

て殴りつけられ半殺しの目にあった、とあります。ある人と語られますが、ユダヤ人だったのでしょう。そこにたまたま祭司、レビ人が通りかかる。祭司とレビ人は、両方とも神殿に仕えている人であり、真っ先に律法を実行する、はずの人でした。しかし、彼らは道端に倒れている人を見ると「道の向こう側を通って行った」とあります。みて見ぬふりをしたわけです。一方で、三番目に登場したサマリア人は「見て憐れに思い、近寄って」手厚く介抱する、というたとえ話です。

たとえ話では追いはぎにあった人はユダヤ人だと想定できますが、半殺しの目にあっている人をサマリア人におきかえてみたらどうなるでしょう。隣人とは誰か＝隣人定義を迫ってくる律法の専門家は彼なりの定義をはっきりと持っているはずです。それに対してイエスはたとえ話で「隣人とは誰か」を明らかにします。

かりに、襲われて半殺しにされた人がサマリア人だったら、専門家の隣人定義に対してより効果的な反証になるのではないかと私は思います。

おそらく専門家の考えている隣人はユダヤ人であり、更に絞り込んでいるかもしれません。だとするとサマリア人がユダヤ人を助けるのではなく、その逆の設定のほうがより有効な反証になるのではないかと思うのです。

しかし、考えてみるとユダヤ人がサマリア人を助ける、これでは、困っている人を見たら誰にでも親切にしましょう、という並みの説教になってしまいました。

このイエスのたとえ話は単なる隣人愛、倫理道徳、ヒューマニズムを教える話にはおさまりません。サマリア人がユダヤ人を助けるところにこの「善きサマリア人のたとえ」の最大のポイントがあります。

## <憐れに思う>

10:33-34 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。

以下は「福音のヒント」から引用します。

ここで使われている「憐れに思い」と訳された言葉に注目すべきです。これはギリシア語で「スプランクニゾマイ splanknizomai」という言葉です。この言葉は「スプランクナ splankna(はらわた)」を動詞化したもので、「人の痛みを見たときに、こちらのはらわたが痛む」「はらわたがゆさぶられる」ことを意味する言葉です。日本語の「胸を痛める」に近いかもしれませんが、沖縄には「肝苦りさ(チムグリサ)」と言う言葉があるそうです。ある人はあえて「はらわたする」と訳しました。このサマリア人は「レビ記には『隣人を愛せ』という律法があった。この人は隣人だから助けよう」と思ったわけではありません。「はらわたした」から助けたのです。目の前の人の痛みを見たときに、その痛みを体で感じるから、ほうっではおけなくなるのです。イエスは、人間には誰でも(ユダヤ人でもサマリア人でも)こういう心があるはずだ、と考えていて、それが神から見てもっとも大切なことであり、その心と心からの行動があるところに神の意思が実現している(もう神の国が始まっている)と語っておられるのでしょう。

放蕩息子のたとえにもでてくる「憐れに思い」スプランクニゾマイ、これがイエスの福音の肝です。この精神がイエスに宿っているので、み言葉がわたしたちの光となるのです。そしてそれが神の国であり、永遠の命のかたちなのです。神は自分の姿に似せて人間をお造りになった、その似姿のひとつがスプランクニゾマイ=憐れに思う=はらわたする、生まれながら誰にでもある善い「こころ」です。神からの贈り物です。どうぞその気持ちを大切に心にしかりと抱きとめてください。